

## 特集

## 身体拘束

から考える



基礎教育と

臨床の関係

基礎教育と臨床教育のギャップは、看護教育において長く議論のテーマとされてきました。臨床では、学校で習ったことは通用しない。現場での新人は何もできない、というイメージが形成されている場合すらあります。学校でいくらケアの理念や看護の基本を習ったとしても、就職後は、現場の慣習、仕事の仕方を身につけることが優先される、という関係です。

今、基礎教育と臨床のそのような大きな溝を象徴しているのが、身体拘束ではないでしょうか。身体拘束はケアの理念に反するために、基礎教育で学ぶべき内容とは位置づけられていません。一方、臨床現場においては、多くの病院で身体拘束を最小限にしていこうとする努力がされながらも、それぞれの領域の特性、また病院の慣習に従って、まだまだ拘束がなされている現状があります。この現状の違いは、身体拘束を「教わっていない」学生や新人看護師にとっては、リアリティショックの大きな要因とも言われています。

しかし、看護師は学生時代からつながって、看護師になります。看護学生は未来の看護をつくる存在であり、学校で身につける看護への思い、問いは、広く臨床現場全体を変えていくための契機であり、教員にもまた、慣習で行われるケアを問い直す役割があるはずです。そしてそうでなければ、現場は何も変わらないでしょう。

身体拘束という基礎教育と臨床の分断を切り口に、看護、看護教育の問題点を問い直すきっかけになることを願います。